

陸軍中野学校誕生期分析

—1937, 8年に叢生した日本人インテリジェンス工作人員養成機関

2014・12・20

山本武利(NPO 法人インテリジェンス研究所理事長)

1、時代背景

満州での対ソ緊張、諜報戦要員の育成への認識→中野学校→世界大戦→中野出身者の活動
→ビルマ、北支、満州でのミニ中野学校

防諜意識の軍内部での高まり→兵務局の誕生→各種防諜関連機関

シナ事変の拡大、ソ連との緊張、南方への野心— インテリジェンス機関、専門要員への軍部
内部の需要増大— 関東軍での特務機関の拡充(図1)— 参謀本部の「諜報宣伝勤務指針」(19
28年)の制定— 第1次大戦の英独資料を参照したインテリジェンス重視の戦術・戦略論→秋草
俊、岩畔豪雄、福本亀治中佐に設立命令、「情報勤務者」の育成

* 1937年3月 軍機保護法の議会通過

2、陸軍内部での防諜気運の高まり—「山」づくり

①「山」に籠る

* 兵務局防諜班(通称兵務局分室)昭和12年春 戸山町の「陸軍軍医学校の敷地の奥に存在
した2階建200坪余の庁舎」で宇都宮直賢陸軍少将の回想では「秋草、宇都宮、福本ら10
数名の各兵科将校、憲兵下士官の努力のもとに昭和12年春に設立。場所は陸軍軍医学校
の校内の裏手にあった。防諜班の仕事は、国際電信電話の秘密点検、外国公館その他の
信書点検や電話の盗聴、私設秘密無線局の探知等が主で、併せて情報の収集に当たった。
国際電話や外国公館及びその関係者と外部との電話による通話は牛込郵便局に集約され、
そこから防諜班の秘密開戦に連絡されてレコーディングされることになっていた。外国公館等
のスタッフが長途汽車旅行をする時は列車の小荷物室で手早く手荷物を検査する作業など
も行った。私設無線局の捜査に当たっては方向探知機を利用したが、その当時はまだ器具
の性能がよくなって、十分な成果は残念ながらあげられなかった」(有賀傳、80～81頁)

* 1937年春、兵務局に防諜班設置主として国内における対ソ諜報、秋草、福本以下10数名
が充当(杉田、55頁)

* 1937年11月 参謀本部第8課(宣伝謀略)、影佐禎昭初代課長

* 香川義雄ノート 2つの極秘機関に当初から関係した将校の克明なノートが岩井忠熊立命館
大学名誉教授から提供された。このノートに基づいて岩井の著書が書かれている。「山」設立
に岩畔から指示された当時は大尉であったが、ノートの終わりの部分はビルマの光機関の
副参謀長(大佐)の記述となっている(山本武利、163頁)。

「山」の業務(岩井、90頁)(図2)

「山」の組織図(岩井、91頁)(図3)

- * 分派機関— 神戸では設立するが、北京、上海では見送られる(香川ノート)
- * 秋草、岩畔から37年3月下旬、警務連絡班の連絡機関への説明を受ける。非匿名「山」、とくに電話盗聴(岩井、92頁)、郵便開封(岩井、96頁)への通信省、中央郵便局高官の協力
- * 東條次官の秘かな訪問、秋草の茶めっ気、東條憲兵の発送への迎合と反発(香川ノート)

② 「山」から下りる

- * 「陸軍省に資料部が出来、それらが秘密工作に専念するようになってからは、少なくとも国内憲兵は、これらから遠ざかった」(『昭和憲兵史』382頁)

3、防諜研究所の誕生

設立場所

秋草文書には「応急的施設トシテ在九段下愛国婦人会本部付属建物一棟ヲ借受ケテ諸準備ヲ進メタカ、同年(昭和十三年—引用者)七月十七日第一期学生十九名入所シタルヲ以テ取敢ス同所ニ於テ教育ヲ開始セリ」とある。

- * 「陸軍省ノ管理ニ属スル建物ノ一部」で2階建の小さな建物、「周囲ノ者ノ為メニハ後方勤務要員研究所ト呼」、「一般住民ハ陸軍省ノ一部ダト思」っていた。中野学校には触れていない。ソ連検事の秋草俊尋問調書(『対ソ情報戦資料』第2巻、507～8頁)
- * 愛国婦人会の別館入口に「陸軍省分室」の看板(中野校友会編刊『陸軍中野学校』(以下定本)、23頁)

秋草構想

- * 秋草文書(C01004653900)「諜報謀略的人格ノ修練」—教育目的
- * 陸軍内で「秋草学校」と呼ばれた中野学校(『憲兵秘録』、124、129頁)

名称—防諜研究所から後方勤務要員養成所へ

陸軍公文書には「後方勤務要員養成所乙種長期第1期学生教育終了ノ件報告」という秋草俊後方勤務要員養成所長文書(C01004653900)の冒頭に「昭和十四年四月十一日防諜研究所新設」と明記されている。また秋草文書では中野への校舎移転直後の「昭和十四年五月十一日軍令陸乙第十三号並「大臣決裁」」に基づき、防諜研究所を廃止し、後方勤務要員養成所を新設した。(C04122321400)

上田昌雄後方勤務要員養成所長「増給支給部隊並ニ・・・」(C04122321400)にも「当養成所ハ昭和十三年三月防諜研究所トシテ陸軍省兵務局内ニ新設」と記されている。定本には「防諜研究所」という記述がない。(「防諜研究所」の記載のある文献は『日本陸海軍総合事典(第2版)』761頁のみ)

夜食支給要請文(C04122317800)にもこの文章が掲げられている。最初の3行ほどはまくら言葉のように本部(たとえば上田所長から東條陸相への公文書)や他機関への要請文に使用されている。この常套化文章に陸軍内部に取りたてた異論がないことは、防諜研究所の存在が関係

者の諒解事項となっていたことを示す。

○ カモフラージュのために「防諜研究所」を、兵站を連想させる「後方勤務要員養成所」に発足
早々名称変更

* 昭和12年 阿南兵務局長が秋草中佐、福本少佐、曾田峯一憲兵愛大尉に 秘密裡に信書
検閲、電話盗聴、無線傍受を命じた(定本、19頁)

田中新一軍事課長が岩畔、秋草、福本に消極的防衛から諜報、宣伝、謀略の研究を命じる(定
本、22頁)

* 昭和11年12月 「陸軍省兵務局において始めて防諜勤務に関する業務を担当するようにな
ってより種々の防諜的対策を立案作成した」(福本亀治「陸軍中野学校其の一」昭和30年)

4、中野学校と登戸研究所

盗聴用レコーダーの開発依頼 篠田鍔(あきら)中佐への(岩井、94頁)

草創期にはその他に記述なし

5、中野学校と石井部隊(731部隊)

石井部隊「対「ソ」諜報並防諜ニ関する事項」(C13021546000) (図5)

石井部隊の防疫給水部(細菌給水部)の隣、谷間の林間に新築(香川ノート)

1940年12月1日 中野学校へ、在学中、「石井軍医大佐の案内で若松町の軍医学校の研究
室を見学、諸君の中に北欧へ勤務するものがあつたら例え一行でも細菌戦に関係あるような記事
など発見した時は是非送って欲しいと言われたことが印象ことのほか深い」(村田克己(乙II)「見
えざる闘いへの開眼—中野学校三年間の回想から」『中野校友会会誌』27号特集、153~4頁)

6、中野学校とゾルゲ事件

1933年 ゾルゲ来日

1937年 尾崎秀実 近衛文麿の朝飯会に。北林トミ、特高警察監視下に。宮城与徳に情報提
供。ゾルゲにソ連から帰国命令

1938年 ゾルゲ、駐日大使オットーの私的顧問に。尾崎、朝日退社、近衛の顧問(年表)

1940年 ロイター通信 ジェームス・コックス 憲兵隊取り調べ中に飛び降り自殺(138頁)

1941年ごろ 憲兵隊直轄の無線探査班、怪電話探知からゾルゲ尾行開始(134頁)

在日ゲシュタポ代表ヨゼフ・マイジンガー大佐の身分保証で、尾行中止

1941年10月 一斉逮捕(『ゾルゲ事件』巻末年表参照)

● 憲兵隊OBが触れたくないゾルゲ事件

* ゾルゲの活動期とくに大きなインテリジェンスの収穫期は日本のインテリジェンス機関学
校の誕生期であった。とくにゾルゲ逮捕を警視庁に奪われた憲兵隊の最大の屈辱事件
である。

* 『日本憲兵正史』は全1450頁で「国際諜報団ゾルゲ機関」にわずか10頁しか割いてい

ない。

- * 『昭和憲兵史』は全802頁で「とらえられなかったゾルゲ事件」に6頁だけ充てた。ただし「わが国における最高の秘密は、最も正確に入手しておったのである。警視庁の検挙によって、その活動は終止符を打たれたが、日本の防諜機関は憲兵をも含めて、すっかり鼎の軽重を問われてしまった」(380頁)と反省と屈辱をわりあい率直に語っている。

7、中野学校vs日本農工学校(延安)、反戦同盟(重慶)

類似点

活動期	ともに1938～45年
人数	2200～2500名
秘匿性	高い
洗脳度	強い
生徒	日本兵
戦術	諜報戦、遊撃戦、宣伝戦

相違点

目標	中野:帝国擁護 延安:帝国打倒
	中野:東亜支配 延安:日本占領
指導者	東條と参謀本部 延安:毛沢東と野坂参三

野坂参三の写真と記録

時期不明の野坂の延安住居前の中国人女性との親しい写真(集合写真シリーズ)

1941年11月7日 会食 11月革命記念 校長夫妻ノ健康ヲ祝ウ。(日本工農学校「学習日誌」

延安革命記念館所蔵)(「学習日誌」)

現地妻は毛沢東提供、ハニートラップ?

常套の歓待法 『延安日記』下、343頁

野坂の監視人? 秘書? 慰安婦?

水谷尚子『「反日」以前』、130頁

Carolle J.Carter, Mission to Yenan,p67

日本語が流暢で利発な中国人の女性と過ごす52歳の野坂

元延安幹部 前田光繁 2014年11月15日インタビュー

中国共産党幹部学校の女子学生、結婚式、披露宴に出席

二人の家に泊まった唯一の証言、そのほかの2、3の外国人も女性提供されていた

野坂は延安に永住覚悟でいたのか

毛沢東公認の生活であったし、幹部の男女関係の規律は弱かったので、同棲は彼の指導者的地位を損ねることはなかった。彼女の秘書としての役割も大きかった。

黒子として野坂を操り捕虜の洗脳、飼育する毛沢東の持久戦

中野出で反戦捕虜(重慶)となった珍しい事例— 渡部富美男(乙II短)の反戦活動

<参考文献>

- 中野校友会編刊『陸軍中野学校』、原書房、1978年
秦郁彦編『日本陸海軍総合事典(第2版)』、東京大学出版会、2005年
『日本陸海軍の情報機構とその活動』、近代文芸社、1994年
岩井忠熊『陸軍・秘密情報機関の男』、新日本出版社、2005年
山本武利『特務機関の謀略』、吉川弘文館、1998年
粟屋憲太郎・竹内桂編『対ソ情報戦資料』第2巻、現代史料出版、1999年
杉田一次『情報なき戦争指導』、原書房、1987年
大谷敬二郎『憲兵秘録』、原書房、1968年
大谷敬二郎『昭和憲兵史』、みすず書房、1979年
加藤哲郎『ゾルゲ事件』、平凡社新書、2014年
全国憲友会編刊『日本憲兵正史』、1976年
菊地一隆『日本人反戦兵士と日中戦争』、御茶の水書房、2003年
水谷尚子『「反日」以前』、文藝春秋、2006年
Carolle J.Carter, Mission to Yanan, Kentucky, 1997
ピュートル・ウラジミロフ『延安日記』下巻、サイマル出版会、1973年

以上